

# 神宮皇學館と大陸

—— 海外修学旅行は学生に何を与えたか ——

長谷川 怜

# 神宮皇學館と大陸

—— 海外修学旅行は学生に何を与えたか ——

長谷川 怜

## 一、はじめに

神宮皇學館は大正11年（1922）から昭和15年（1940）にかけて、延べ19回にわたる海外修学旅行を実施した。その行き先は朝鮮半島、中国東北部（満洲）、華北地域であった。皇學館の海外修学旅行については、大平和典『皇學館史話』所収の「神宮皇學館の海外交流」において簡単に紹介されている<sup>1)</sup>。また拙稿「学生は大陸で何を見たか—神宮皇學館の海外修学旅行から」（『日本歴史』第872号、令和3年）で主に大正期の旅行を取り上げ、旅行において選択された訪問先の感想の類型化を行うと共に、教育効果について分析した。

ただし拙稿は大正期の旅行記を中心に扱ったものであり、19回にわたる海外修学旅行の全体を通じた分析をしたものではなかった。大正期に絞ったのは、旅行が恒例化して現地についての事前情報が多く蓄積された昭和期と比較して、初めての経験である旅行に対する新鮮な感想が多く記されているためである。大陸に対するバックボーンとなる知識をそれほど持たない（と考えられる）学生たちの純粹な意見・感想は、当時の日本人一般の大陸に対する平均的なまなざしの一つとして扱うことができるだろう。昭和期になると満洲事変、満洲国の成立など日満関係はそれまでと大きく変化し、新聞や雑誌などのメディアをはじめとして満洲に関する諸情報が世に溢れていく。神宮皇學館の修学旅行も社会情勢・時局の変化と無縁ではなく、参加した学生たちの現地での体験の内容や意識にも影響を与えた。

そこで本稿では、改めて海外修学旅行の概要について確認した上で、大正期

の事例との比較も行いながら昭和期の旅行の特徴や目指された教育効果、学生の反応を分析する。学生たちが現地を見ることによって大陸の人々に親近感や同朋意識を持つようになった一方で、現地の近代的な街並みなどは日本の国威を学生たちに感じさせたこと、また将来の就職先として大陸を目指す考えが学内で定着していったことを明らかにする。

## 二、日本人による満洲・朝鮮旅行のはじまりと旅行海外修学旅行

日本における海外修学旅行の始まりは明治29年（1896）に長崎商業学校が実施した上海旅行であった<sup>2)</sup>。商業学校では卒業後に大陸で働くビジネスマンを養うという意味もありいわば下見の意味を持って海外修学旅行が早い段階から実施されていたのである<sup>3)</sup>。ただし、まだこの時期には観光旅行や修学旅行が一般化したとは言い難く、徐々に実施されるようになるのは日露戦争の後である<sup>4)</sup>。

日露戦争の翌年、明治39年（1906）に陸軍や関係機関が援助する教員・学生向けの「満洲教員視察旅行」が企画されたのを皮切りに、全国の学校が満洲（中国東北部）や朝鮮を対象とした独自の修学旅行を実施するようになった<sup>5)</sup>。同時に、商況視察などビジネスを目的とした一般の旅行も増加した。

日露戦争の最中から戦後にかけて日本と大陸をつなぐ交通網の整備・発展は著しく、大阪から門司を経て大連へ至る航路や下関から釜山への航路などが開設され定期便が運行された。また、明治39年に南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）が設立されると、かつてロシアが敷設した東清鉄道南部支線のうち大連～長春（寛城子）に至る路線が日本の経営下に置かれた。さらに奉天から安東を結ぶ路線が旅客用に整備されて朝鮮半島を縦貫する路線と接続した。こうして、早くも明治末の段階において日本から大陸へは航路・鉄路によって2日～3日程度で移動できるようになった。

交通インフラの整備に留まらず、日本人の満洲旅行を後押しした存在として満鉄の鮮満案内所、ジャパン・ツーリスト・ビューローを挙げることができる。満鉄は明治42年から『南満洲鉄道旅行案内』を発行して各地の観光情報を提供

していたが、大正7年になると満鉄東京支社に旅行案内を主要な業務とする鮮満案内所を設置して旅客の誘致に努めた。また、明治45年にはジャパン・ツーリスト・ビューローが大連に支部を設置し、後に奉天、長春といった主要都市にも支部が置かれた。このように旅行を行うための様々なインフラが複合的に整備され、大正期に入ると海外修学旅行を行う学校は更に増加していった。旅客の増加は大陸の鉄道運輸にも影響をもたらし、例えば朝鮮鉄道は「各学校生徒の修学旅行及鮮満地方観光及視察団体の頻繁たるもの」により好況を呈したという<sup>6)</sup>。

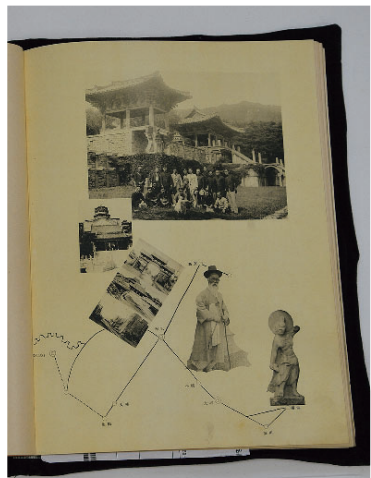
### 三、神宮皇學館による海外修学旅行の概要

すでに拙稿「学生は大陸で何を見たか」で概要を示したが、改めて神宮皇學館の海外修学旅行について確認しておきたい。

大正11年、本科生を対象として満洲と朝鮮における海外修学旅行が実施された。第1回の旅行を引率した教員である竹島寛が「年中行事の一とし、永久に継続せしめられたい、學館関係の人には一度は必ず出かけらるゝやうにした<sup>7)</sup>」と述べたことから分かるように、旅行の教育的効果は高いと判断され、翌年から恒例行事となった。年度によって参加者数には異同があるが、20名前後が参加しており、延べ人数は約400名程度と考えられる。

記録は、学友会文芸部が発行する雑誌『勢陽』や『勢陽学報』をはじめとして、学術雑誌の『皇學』等に掲載された。旅程はもちろんとして、見学した史跡や施設の解説、現地で触れ合った人々との交流の感想も含め旅行の様子を詳細に知ることができる<sup>8)</sup>。また各年度の卒業アルバムにも1ページずつではあるが、記念写真やスクラップが掲載されている。

大正11年から昭和15年に至る神宮皇學館の海外修学旅行の訪問地は地図・表の通りである。

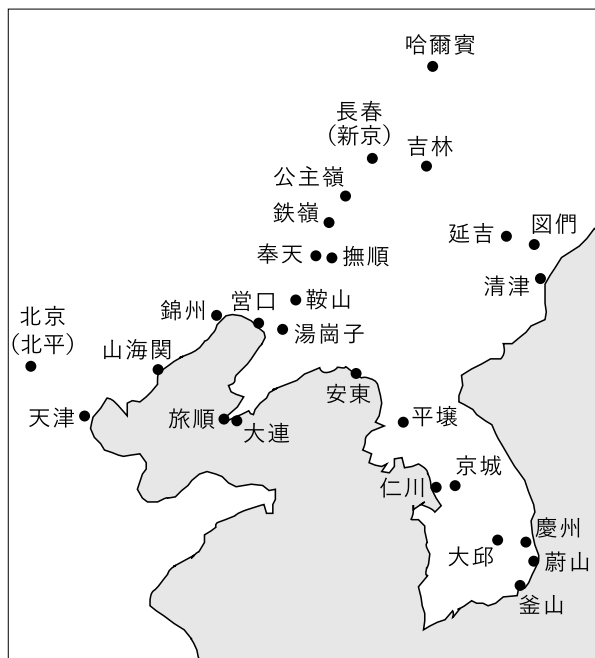


卒業アルバムに掲載された  
修学旅行の写真（昭和10年）



旅順の白玉山にて撮影  
（昭和14年度卒業アルバムより）

※皇學館大学附属図書館蔵



海外修学旅行の行き先

神宮皇學館と大陸（長谷川）

神宮皇學館の海外修学旅行 旅程一覧

旅行期間	旅 程	参加者数
大正11年（1922） 7月12日～27日	(12)伊勢—(13)門司—(14,15)船中泊—(16)大連—(17)旅順—(18,19)奉天—(20)撫順・奉天・車中泊—(21)平壤—(22,23)京城—(24)仁川・京城—(25,26)釜山—(27)下関	学生14名、 教員2名
大正12年（1923） 7月14日～29日	(14)伊勢—(15)神戸—(16)門司—(17)船中泊—(18,19)大連—(20)旅順—(21,22)奉天—(23)撫順—(24)安東・平壤—(25,26,27)京城—(28)釜山—(29)下関	学生15名、 教員2名
大正13年（1924） 7月14日～29日	(14)門司集合—(15)船中泊—(16)大連—旅順—奉天—撫順—平壤—京城—釜山—帰国 *参加者が個別に感想を記す形式の旅行記であるため各滞在地の日付不明	学生17名、 教員2名
大正14年（1925） 7月15日～30日	出国—(18)大連—(20)旅順—(21)奉天—(23)撫順—平壤—京城—慶州—下関 *参加者が個別に感想を記す形式の旅行記であるため各滞在地の日付不明	学生12名、 教員2名
大正15年（1926） 7月16日～8月1日	(16)門司—船中泊—(21)天津—(22, 23, 24)北京—(25)船中泊—(26)大連—(27)奉天—(28)撫順—(29)平壤—(30)京城—(31)釜山—(8/1)下関	学生18名、 教員2名
昭和2年（1927） 7月16日～8月4日	(16)下関—(17)船中泊—(18)釜山—(19,20)慶州—(21,22)京城—(23)平壤—(24)安東—(25)奉天—(26)長春—(27,28)哈爾賓—(29)奉天—(30)撫順—(31)旅順—(8/1)大連—(2,3)船中泊—(4)門司	学生20名、 教員2名
昭和3年（1928） 7月16日～8月1日	(16)下関—(17)船中泊—(18)釜山—慶州—(19)慶州—(20)京城—(21)平壤—(22)安東・車中泊—(23)奉天—(25)撫順—鞍山—湯崗子—營口—大連—旅順—(8/1)帰国 *参加者が個別に感想を記す形式の旅行記であるため日付不明の箇所あり	学生15名、 教員（人数不明）
昭和4年（1929） 7月13日～7月28日	(13)下関—(14)釜山・慶州・大邱—(15)慶州—(16,17)京城・仁川—(18,19)平壤—(20)撫順—(21)奉天—(22,23)哈爾賓—(24)長春—(25)旅順・大連—(26,27)船中泊—(28)門司	学生18日、 教員2名
昭和5年（1930） 7月13日～7月28日	(13)下関—釜山—慶州—京城—仁川—平壤—奉天—長春—哈爾賓—旅順—大連—(28)帰国 *参加者が個別に感想を記す形式の旅行記であるため各滞在地の日付不明	学生14名、 教員2名
昭和6年（1931） 7月15日～7月31日	(15)下関—(16)釜山—(17)慶州—(18)京城—平壤—(21)奉天—哈爾賓—大連—(27)船中泊—(31)神戸 *参加者が個別に感想を記す形式の旅行記であるため日付不明の箇所あり	学生16名、 教員（人数不明）
昭和7年（1932） 7月12日～7月28日	(12)下関—(13)釜山・蔚山—(14)慶州—(16,17)京城・仁川—(18)平壤—(19,20)奉天—(21)長春—(22)哈爾賓—(23)車中泊—(24)旅順—(25)大連—(26)船中泊—(28)門司	学生23名、 教員2名

旅行期間	旅 程	参加者数
昭和8年(1933) 7月15日～7月31日	(15)下関—釜山—慶州—大邱—京城—仁川—平壤—奉天— 新京—哈爾濱—奉天・撫順—旅順—大連—帰国 *座談会形式の旅行記であるため各滞在地の日付不明	学生24名、 教員2名
昭和9年(1934) 7月	釜山—慶州—京城—北平—大連—旅順—新京—吉林—朝鮮 半島經由で帰国	不明
昭和10年(1935) 7月	釜山—慶州—京城—平壤—奉天、新京、大連、旅順、北平 *雑誌に旅行記の掲載がなく詳細不明。訪問地は昭和10年 度の卒業アルバムに地図が掲載されているが、行程不明部 分は都市名を羅列した	不明
昭和11年(1936) 7月16日～8月4日	(16)敦賀—(18)清津・図們・延吉—(19)吉林—(20)新京— (21)旅順—(22)大連—(23、24、25、26)天津・北平—(27) 車中泊—(28、29)奉天—(30)撫順・安東—(31)平壤—(8/1) 京城—慶州—釜山—帰国	学生20名、 教員2名
昭和12年(1937) 7月15日～7月下旬	(15)下関—(16)慶州—(17)京城—(18)平壤—(19)安東— (20)奉天—(21)撫順—(22)新京—(23)哈爾濱—(24)吉林— 鞍山—大石橋—湯崗子—旅順—(28)大連—(8/1)帰国 *部分的に日付不明の箇所あり	学生10数名 (人数不明)、 教員(人数 不明)
昭和13年(1938) 7月16日～8月1日	(16)下関—慶州—大邱—京城—仁川—平壤—安東—(23)撫 順—(24)奉天—(25)新京—(26)哈爾濱—(27)車中泊—(28) 旅順—大連—(8/1)帰国 *部分的に日付不明の箇所あり	学生11名、 教員2名
昭和14年(1939) 7月19日～8月4日	(19)下関—釜山—(20、21)慶州・大邱—(22、23)京城・仁 川—(24、25)平壤・安東—(26、27)撫順・奉天—(28)新京・ 吉林—(29)哈爾濱—(30)車中泊—(31)旅順—(8/1、2)大連 —(3)船中泊—(4)門司	学生14名、 教員2名
昭和15年(1940) 7月24日～8月9日	釜山—慶州—大邱—京城—平壤—奉天—撫順—新京—吉林 —哈爾濱—旅順—大連 *詳細な日付不明	学生7名、 教員2名

大正期に行われた第1回旅行では、まず朝鮮半島西岸を北上して大連へ上陸している。満鉄路線で長春へ至り、奉天から安奉線で南下した後に朝鮮へ入り、平壤や京城を経て釜山から航路で帰国した。以後、このルートが踏襲されるが、昭和2年以降は哈爾濱が追加され、北満洲が見学地に加えられた他、昭和9年を含め複数回にわたり華北(天津・北平)が見学地に加えている。また、日本海ルートを使い朝鮮半島の北部から大陸へ入る変則的なルートを取る年次もあった。

拙稿では大正期に実施された旅行記録を中心に分析し、神宮皇學館の旅行の行き先を類型化すると以下のようなことになることをすでに指摘した<sup>9)</sup>。

- ①日露戦争の戦跡と慰霊の場所…旅順の二〇三高地やロシア軍要塞など
- ②日本の大陸進出を象徴する場所…近代的な大連の街並みや満鉄が運営する炭鉱など
- ③中国・朝鮮の文化や歴史を象徴する場所…朝鮮の古寺、奉天の北陵など
- ④現地社会・風俗を体感できる場所（あるいは日本人としての優越感・一等国としての意識を感じられる場所）…各都市の旧市街

拙稿では①～④について具体例を示しながら学生たちの感想を分析し、旅行によって学生たちの見聞が広がった（教育効果があった）と教員によって判断されたこと<sup>10)</sup>、先進国である日本という優越感と遅れた中国・朝鮮、という蔑視のまなざしを持ちつつも、現地での見聞や人々との交流を通じ現地への親近感が醸成されたことなどを指摘した。

これらの行き先に加え、神宮皇學館の特色といえるのが各都市で第一に神社へ足を運び、玉串奉奠を行い正式参拝していることである。大連神社をはじめ、大陸の各地には明治末以来多くの神社が存在し、そこでは館友たちが神職を務めていたのである。全ての年次において、館友は到着した港から神社や見学地への移動手段の準備、食事や休憩の際の飲料、見学地におけるガイド役などあらゆる援助を提供した。もちろん、同時期に行われていた他の学校の修学旅行でも現地に暮らす卒業生が援助を行う事例はあるが<sup>11)</sup>、日本人が進出するほぼ全ての都市に神社が存在しており、そこにはごく一部の例外を除いて館友神職がいたため神宮皇學館の修学旅行では昭和3年の一度を除き旅行社の利用はなされなかったのである（なぜこの年だけジャパン・ツーリスト・ビューローを利用したのか、その理由については記録がない<sup>12)</sup>）。長期にわたって海外修学旅行が継続でき、なおかつ円滑に旅程をこなすことができたのは館友による充実した援助があったからだといえる。

#### 四、学生たちの見た大陸—大正期と昭和期の比較

それでは、大正期と昭和期を比較した際に見いだせる違いとはどういった点にあるのか。大正と昭和という区分はあくまでも天皇の代替わりによる区分で



あるとはいえ、元号の変遷とほぼ同時並行で満洲地域には大きな政治変動や軍事的な動きがあり、それが神宮皇學館の旅行のあり方や参加した学生の意識・感想に変化を与えている。

修学旅行が開始された大正11年（1922）は、大陸においてはシベリア出兵が終結する年であった。出兵は日本にとっては大きな出来事であり、また日ソ関係や日中関係にも影響を及ぼしたが、南満洲における日本の勢力範囲に対して直接的な影響を与えることはなかったといえる<sup>13)</sup>。だが、中国情勢の劇的な変化は日本の大陸政策の方向性を変化させていく。1924年（大正13）に第二次奉直戦争が勃発して張作霖軍が南下し、さらにそれは北京の政変へとつながった。張作霖は北京へ進出し、いったん1925年に満洲（東三省）へ撤退するが、翌年には東三省自治宣言を出し入京して安国軍総司令に就任した。1927年には張作霖が北京で軍政府を設立し大元帥となるものの短期間で求心力を失い、翌年の1928年（昭和3）に爆殺されるのである。

こうした政治的な大変動を学生たちも満洲で感じ始めるようになる。旅行先で危険に遭遇するといった顕著な影響は記録を見る限りは存在しないが、昭和4年（1929）には奉天にある清朝の皇帝を埋葬した北陵において反日的スローガン（「打倒帝国主義」、「打倒我国敵人日本」）が柱に書かれている様子を実見したことが旅行記に示されている<sup>14)</sup>。関東軍の謀略による張作霖爆殺後、息子の張学良が国民政府に合流したのが前年であり、満洲地域の対日感情が悪化していた状況を感じさせる記述である。

またこの旅行では学生らは奉天から哈爾濱に向かっていく。当時、長春以北に行くためには満鉄から東支鉄道（中東鉄道）へ乗り換える必要があった。この路線は、もともとロシアが建設したものでかつては東清鉄道と呼称されていた。ロシア革命後のシベリア出兵の最中、連合国鉄道管理委員会が経営に関わり、1924年（大正13）からは中ソ合弁経営となった。昭和7年（1932）に満洲国が成立するとその路線は満洲国の領土内に含まれたため、日本側はソ連の影響力を削減するため売却の交渉を続け、昭和10年に満洲国へ売却され満鉄が運営した。昭和2年から昭和9年までの間に哈爾濱を訪問した学生たちの記録には、清掃が行き届き日本語も通じる満鉄と比較し、整備されていない東支鉄道

の運営に不快感を露わにしている様子が往々にして記録されている<sup>15)</sup>。だが、南満洲＝日本による統治が行われている地域<sup>16)</sup>と異なり、長春以北では彼らの身体に後ろ盾はなく、ここで初めて彼らは「外国」を経験したのである。

1929年、張学良政権は哈爾濱のソ連領事館を強制的に搜索するなどし、中東鉄道の諸権利の回収を目指して実行行使に出ていた。学生たちの旅行は両国の緊張が高まる中で行われたのである。感想文にある「戦乱のハルピン」「東支鉄道事件で風雲頗る急」とは電信局接収事件など奉天政府とソ連の緊張を指していると考えられる。情勢の変化にも関わらず旅程に変更はなく彼らは哈爾濱でコスモポリタンな街の雰囲気を楽しんでいるが、帰国後の10月に国境で奉ソ紛争が勃発していることから分かるように、この当時の北満洲が軍事的にかなり不安定な状況にあったのは事実である。教育の一環である海外修学旅行の感想文に危険な状況であったことを強調して書くことをあえて避けたとも推測できるが、旅行記の端々から不安定化する満洲情勢を読み取ることができる。

昭和初期の満洲の政治的な不安定化は、日本の満洲権益の基盤を揺るがしかねない大問題として認識された。そして問題を一挙に解決することを目的として昭和6年（1931）9月、関東軍によって満洲事変が引き起こされ、翌年3月には満洲国が「建国」された。幸いなことに、昭和6年度の旅行は7月に実施されたため事変の影響は受けなかったが、帰国した直後の出来事だけに事変の報道に対する学生たちの関心は高かったようである。旅行記の末尾には「我々の靴の裏皮にまだ、満洲でくつついた黄土が去らぬ中に、彼地は俄然硝煙と剣戟の巷と化した…如何に熱し易くさめ易い国民性とはいへ、早くもあの満洲を過去帳に書入れる様な事を誰が許すものか。編者の眼は日々の新聞の報導に今尚奪はれつゝある」という感想が付け加えられている。

なお、実際に満洲国が成立する翌年以降の旅行の様子と学生の感想等については次節で検討する。

これまで述べてきたような外的な要因とは別に、皇學館の内的な要因によっても旅行のあり方や学生の感想には変化が見られる。複数回にわたって旅行が実施されるようになると、現地で見聞したこと、様子などが感想文や先輩から後輩への話などで広く共有されるようになり、現地に対する一定の基礎知識が

学内で蓄積されていく。『勢陽』に掲載される感想文の末尾に、次年度に旅行する後輩たちの便宜をはかるため旅行の持物など準備に必要な情報が掲載されるようになるのである。昭和4年の旅行記には、旅行中の病人とその症状を日にちごとに記載し、携帯すべき医薬品の種類、おすすめの土産物、小遣い銭の額、税関における注意事項まで微不至に入り細を穿つ解説が掲載されている。

また、旅行記には見学した史跡や古跡になどに関する学術的解説や現地の人々の生活習慣などを記録した民俗学的な記述がより多くなっていく。この点は大正期と昭和期で明確に変化するわけではないとはいえ、初期の旅行記に含まれる情報は当時の満鉄などが発行していたパンフレットなどに書かれた概説的な内容が多いのに比して、年が降るほど歴史や文化に関する解説的内容に詳しさが増していく傾向が見て取れる。この点については当時の授業内容を踏まえた検討が必要であろう。

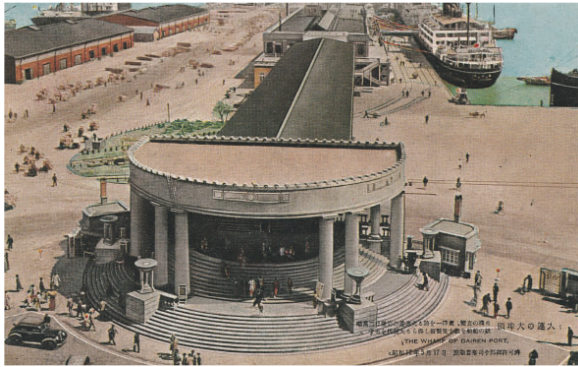
知識やノウハウの蓄積がなされたことで、旅行に対する不安は取り除かれ、より効率的な見学を可能とし、また現地を見るまなざしにも変化を与えた。

初期の記録には何を見ても目新しく純粋に感動するような記述が多い。南満洲最大の炭鉱である撫順を訪ねた際の記録はそれが顕著である。第1回の参加者たちは大山坑と名付けられた坑道を地下約370メートルまでエレベーターで降下した。その時の記録には「一二三四<sup>フィート</sup>呎の地下に直下する僅か四十五秒の間エレベーター上の吾々は全くの地獄を見た様である。奈落の底についたと思ひ乍ら恐る恐る目を開くと電灯が眩ゆく輝いてゐる。全く予想外である…初めての僕等には本当に恐怖をさへ感じられた」<sup>17)</sup>といったようにアトラクションを経験したような驚きが記されている。この“アトラクション”は翌年以降も続けられたが、エレベーター降下の驚きは新鮮味を失ったようで、昭和4年の撫順探訪記には単に坑道へ降りたことが淡々と述べられるに過ぎない。

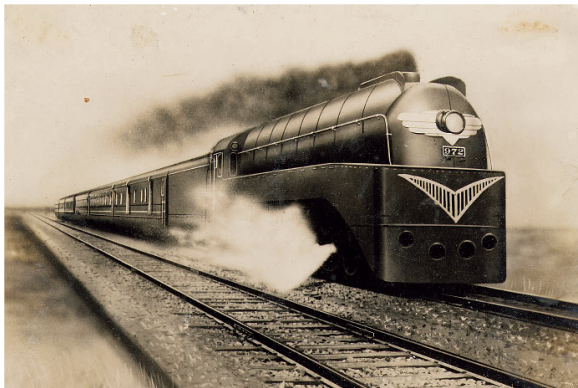
ただし、それは比較を通して見えてくる感想の変化の一断面であり、日本国内よりも近代化された住宅や交通網に感心したり、現地の学校の立派な校舎を見て皇學館は比喩にならないとやや自嘲気味に感想を述べたり、多くの点で満洲経営の先進性に驚きを覚えるという記述が各年次に共通しているのもまた事実である。昭和4年の記録には、哈爾濱と大連を比較した感想として「絶望

的なニヒーズムのハルビン…（\*筆者注：大連では）日本政府の統治の下に安い生活費できれいな文化住宅に住める」という文章が登場するが<sup>18)</sup>、日本の統治地域にこそ近代性が根付いているという認識を彼らが持ち、それを踏まえて満洲の先進性を驚きや憧れを持って受け止めているのである。物見遊山的にただ旅行をしているのではなく、時局や社会状況を理解した上で現地の様子を眺める姿勢は神宮皇學館の各年度の学生に共通していたといえる。

#### 絵葉書に見る海外修学旅行の訪問地



学生たちが上陸した大連港（1930年代の満洲の絵葉書。以下同じ）



学生たちが移動の際に乗車したあじあ号（パシナ）



日露戦争の記憶を伝える旅順のロシア軍要塞



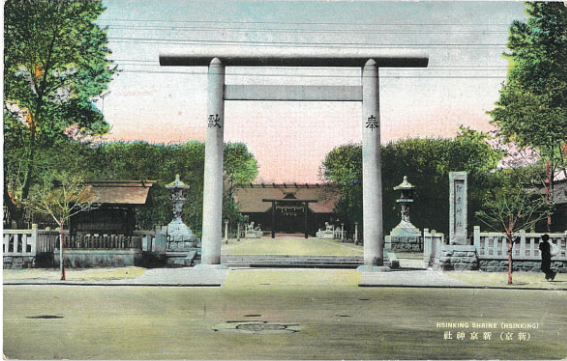
清朝皇帝が埋葬される奉天の北陵



満洲国の首都「新京」に建設された官庁（國務院）



ロシアが建設した異国情緒漂う哈爾濱の街並み



旅程には神社参拝が組み入れられていた（新京神社）



朝鮮総督府など公的機関も多く訪問した

## 五、満洲建国と修学旅行

昭和7年以降、修学旅行先は「満洲国」になった。それまで関東州と満鉄附属地に限られていた日本の勢力範囲が満洲国成立によって満洲全域に拡大したことは、学生の意識にも明らかに影響を与えている。昭和7年度の修学旅行生が満洲国を訪問したのは成立からわずか4カ月後であり、比喩ではなく硝煙のにおいが漂うような緊迫した雰囲気がかしこに見られたのである。実際、旅行中に彼らは満鉄沿線の駅で「匪賊」に駅長が拉致されたというニュースを聞き、乗り込んだ列車内では「つい先の駅で匪賊襲来」と聞かされ恐怖を味わった<sup>19)</sup>。

出発する前、彼らは「満洲は日本の生命線」という言葉を「何度聞かされた事であらう、だが我々には、はつきりしない。『新満洲国の認識』。何と道俗化した語であることよ、そして又何と空漠たる概念であることよ」とやや冷めた目線で満洲問題を見ていた。しかし帰国後には「兎に角是非一度は行つて来給へ、旅の興趣と国情の現状に関心を持つ人は」という言葉に変わり、各地へ帰省する学生たちの胸のうちには「鮮満に対する新知識者、認識者といふ誇らしい態度」があった。

旅先で「匪賊」の恐怖を感じたがゆえに、ホテルの前に積まれた土囊や守備兵の姿や駐屯する兵士を見て「我等の生命線保障の任にあたつてゐるのだ」と感謝の念を強く持った。また、満洲国の首都である新京では「堯舜再現盛農豊国」の文字を大書したバスや街路を穏やかな表情で歩く人々の姿を見て「日満提携」の成果を感じると共に「我国の東洋に於ける使命の重要さを掴み、日本国民としての信念を確立」したと感じている。

やや時期が降るが昭和13年の記録を見ると、すでに日中戦争が勃発した後でもあり、まず朝鮮で内地よりも緊張した「事变下」の雰囲気を感じ、「満洲国が我が陸の生命線たることは旅行して初めて本当に認識」したと記されており<sup>20)</sup>、満洲国成立以後の学生の感想には時局に鋭敏であるという共通性が見られるのである。

緊迫した情勢だけでなく満洲国の発展を目の当たりにすることで、彼らは日本による満洲経営の意義や重要性を認識するようになったといえる。彼らの記録は、政策主体側が見せたかった（アピールしたかった）満洲経営の成果を反映した内容であり、従来の研究でも指摘されているように満洲旅行にプロバガンダとしての要素が多分に存在したことを示している。

翌年（昭和8年）の旅行記録は「満鮮旅行座談会記録」と題され参加教員1名、学生20名の会話形式となっている。そのため、会話による端的な感想が多く満洲経営の成果に関する具体的記述には乏しい。だが、学生たちの意識を分析する上で重要な発言が記録されている。

僕達は満洲へ行つて来たが何か落し物をした様な気がする。行く前の期待と帰つてからの気持と可成り違ふんだ。これは誰でも持つだらうが。例の学徒研究団としては東大の沼田大佐はその研究団の業績を三つ程あげてゐる。一は知識的、二は精神的、もう一は日満両国青年の交歓なんだ。僕達にも交歓の機会を与へてほしかつた…僕達の旅行は大団体ではないから無理かも知れませんが、普通の旅行とは違つてゐるのですからもう少し満洲の方面に重点を置いて欲しいと思ひます。<sup>21)</sup>

彼らは約2週間の大陸旅行を実施し、知識＝実地見学により大陸の歴史や文化についての見聞を深める、精神＝満洲経営の成果を知ることを通して日本帝国の偉大さを感じる、という点では得るものがあつたが、現地の同年代の青年との交歓がなかつたことを不満としている。会話中に挙げられている「例の学徒研究団」とは、満洲産業建設学徒研究団を指す。これは満洲の産業建設に関わる人材を育成することを目的として全国の高等教育機関の学生を対象に昭和8年から行われた事業である<sup>22)</sup>。約1か月（グループによってはさらに2週間）にわたり1000名の学生を満洲へ派遣し、グループごとに研修、調査、現地学生との交歓会を行い、帰国後は講演会や展覧会を開催して満洲の情報を一般に広め、さらには詳細な研究報告集も刊行された。皇學館の学生たちにはこうした同世代の学生たちの活動を羨む気持ちがあつたようである。



研究団は高等教育機関の学生であればほぼ制限なく参加することができたものであり、実は神宮皇學館から陸軍省大臣官房宛に「毎年同地方ニ致居候次第ニテ是非参加致度希望」<sup>23)</sup>を述べた書簡が送られている。しかし、理由は不明ながら結局神宮皇學館は研究団には参加せず、引き続き独自の修学旅行を継続した。

ここで皇學館の学生が「交歓」を重視あるいは希望したことについて考えてみたい。大正期の段階から皇學館の学生たちは現地の朝鮮人や中国人、ロシア人などと交流し、片言の言語でコミュニケーションを楽しんできた。多くの場合、短時間の会話に終始したが、そうした交流を通じて植民地支配を受ける現地の人々と、支配者としての日本人を対比させて考える学生も存在した。だが、旅程はいずれの年次もタイトに組まれており、移動に次ぐ移動で彼らはめまぐるしく多くの情報に触れ、それらを咀嚼しないうちに新たな刺激を受け続けて帰国したというのが現実であった。昭和7年の記録には「余りに短かい、余りに<sup>あわただ</sup>周章しい旅」という語も見え、それが大方の感想であっただろう。その一方で、上に挙げた研究団の発行した報告集には満洲国が傀儡国家であることに対する批判や、現地の学生との長時間の対話によって同朋意識を持ち、偏見無く日滿が友好を紡いでいく必要性についての意見などが赤裸々に記され、プロパガンダとはおよそ無縁の独自の考えが披歴されていた<sup>24)</sup>。同世代の成果に触れたことで自らの満洲体験の不足部分が浮き彫りとなったといえるのではないだろうか<sup>25)</sup>。

修学旅行は2週間にわたるとはいえ、移動距離と見学地の豊富さを考えれば短い旅行であった。得られた成果は限定的だったかも知れないが、それゆえにむしろ学生たちは日本の大陸経営（満洲国の成立など）について帰国後も深く考え続ける傾向を生んだといえよう。そして、大陸への興味関心の高まりは、卒業後の進路へも影響した。

## 六、人々へのまなざし—蔑視と同胞意識の併存

修学旅行の最中、名所旧跡や満鉄による開発の現場ばかりでなく、一般の朝

鮮人や中国人らが暮らす街路、市場などへも学生たちは足を運び、また列車内では現地の人々と乗り合わせて移動している。

修学旅行に限らず、この時期の満洲・朝鮮旅行には、日本の大陸進出のプロパガンダという側面が少なからず存在した。日露戦争の激戦の跡を見ることで人々は日本の栄光の歴史を再認識し、満鉄が行うインフラの近代化の実態は先進国としての日本の姿を感じさせた。大陸への旅行には国家への帰属意識を高めるという啓蒙的な目的があり、国策会社である満鉄はもちろん、政府や軍、外務省なども様々な面で援助を行い、あるいは旅行の奨励をしたのである<sup>26)</sup>。

こうしたプロパガンダとしての旅行の側面においては、現地の人々の存在は捨象されている。いや、むしろ日本の先進性を際立たせるための“遅れた存在”として扱われる。そして、そうした旧態依然とした文化・生活を、日本の統治によって近代化させた（させていく）という日本の使命を強調するストーリーが描かれるのである。それでは、実際に現地を見た学生たちはそこで生きる人々たちにいかなるまなざしを注ぎ、何を感じたのだろうか。

大正～昭和にかけて首尾一貫しているのが、臭気に対する嫌悪感である。大正期の旅行記には「支那街で一種異様の臭気」を感じたなどの感想があり<sup>27)</sup>、また昭和期の記録にも朝鮮半島の鉄道内に漂う朝鮮人の「大蒜」<sup>にんにく</sup>のにおい、「不快な体臭を発散」させる中国人の「下層民」に閉口するという記述が多く見られる<sup>28)</sup>。また、近代的な日本統治下の街並みやインフラへの賞賛は、現地の人々の前近代的な生活を逆説的に浮かび上がらせることにつながっている。

その一方で、多くの旅行記に朝鮮人や中国人、あるいはロシア革命後に満洲へ亡命してきた白系ロシア人たちと積極的に関わり、言葉を交わし、親近感を持つという記述が存在する。とりわけ朝鮮人に対しては日本の領土内に暮らす同胞とみなす意識が強くあらわれるようである。

昭和6年の記録には、朝鮮平壤の仏国寺で「ローカルカラーの濃厚な民謡を収めてから帰らねば」と考え、若い写真屋からアリランの歌を聞いてノートに書き留めたという記述がある。その学生は朝鮮の文化や歴史に造詣が深く、様々な故事なども記載しているが、現地の風物と共に朝鮮人たちと触れ合うことで、抑圧される植民地の朝鮮人と、統治する側に立つ日本人＝自分という立

場を相対化するようになる。彼は以下のように語る。

大きい力の下に黙つて自国の史跡を案内してゐる青年鮮人と、征服者的気持でドライブして廻る一行との皮肉な心持を思ひ浮べさせられるのであつた。更に此の気持は、京城の廢宮を見るにつけて一層嵩じて来るのを覚えた<sup>29)</sup>。

彼らの行動や純粋な感想は、ニュートラルな立場から現地の在り様を理解しようとする姿勢を持ち合わせていたことを示す。大陸経営を行う日本人としての優越感を持つ一方で、同じ地域・文化圏に暮らす人々を理解し、旅行先に溶け込もうとする柔軟な思考を有していたのである。

また、朝鮮神宮に参拝する朝鮮人の数が増加していることを神宮の神職から聞き、実際に朝鮮人たちが参拝する姿を見たことで日本文化が半島に根付くことを好ましく思う様子も記録されている。朝鮮人参拝者の増加については、これは明らかに総督府の政策によって半強制的に参拝することが求められた結果であると考えられ、その視点は学生たちには欠落しているものの、神社への参拝者に対する同朋意識を彼らが持っていることが分かる。旅行記には「内地に於ては我々でも輕蔑し勝ちな朝鮮の人達に対して『同胞だ』との親しみを感じた」という言葉が綴られている<sup>30)</sup>。植民地の人々を日本の領域に暮らす同胞であると見なすための一つの指標が神社への参拝であり、その姿を実見することが彼らに日本帝国の広がりを実感させた。

## 七、就職先としての海外神社

海外修学旅行において、皇學館は一部の例外を除いて旅行社を利用しなかつた。彼らの円滑な旅行は大陸に根付く館友のコーディネートによって実現されていた。

すでに拙稿でも述べたが、昭和13年の記録を見ると延吉神社、吉林神社、新京神社、大連神社、奉天神社、興主嶺神社、鉄嶺神社、撫順神社、錦州神社、天津神社、朝鮮神宮、平壤神社、清津神社を巡拝し、大連、奉天、天津以外はすべて館友が神職を務めていたという<sup>31)</sup>。大陸に根付く先輩たちの姿は、学生

たちに海外飛躍の希望を少なからず持たせたであろう。また、現地の館友からも学生の大陸での就職を後押しするため、館長の修学旅行参加によって現地でも意見交換を行いたいという希望が出ていた<sup>32)</sup>。昭和8年の座談会では、他の学校について「向ふに旅行すれば、すぐその視察談とか感想だとか調査事項だとかをパンフレットにして総督府やその他の関係方面に送り本人達の写真まで副へて就職を依頼する」という裏話が語られている。外地での就職を見越して修学旅行を実施する学校があったことが分かる。皇學館ではそうしたあからさまな就職斡旋までは行わなかったものの、「今神社の創設せらるゝ者、年と共に多きに上るべく、此際学館出身諸君の進出を希望して已まぬ」という意見があり<sup>33)</sup>、記録から判明する限りにおいて海外修学旅行に出かけた全学生のうち約2割が外地で就職しているのである<sup>34)</sup>。

また、旅行は海外神社を実見するという得難い機会でもあり、コンクリート製の社殿を珍しがったり<sup>35)</sup>、大陸で行われている雅楽についての分析を旅行記に書いたりする事例を見ることができる<sup>36)</sup>。「鮮満の神楽」と題する短文には、朝鮮の神楽は内地と同じ純和風の雅楽と、李王職雅部による朝鮮雅楽とが併存していると書かれている。朝鮮神宮が日本雅楽の中心であり、神楽を舞うのは朝鮮人の女性であるという。一方、満洲では「神楽雅楽の備への見るべきものゝない」とされ、「大陸発展の事なれば自給自足を必要とする。大陸の神社界に出でむとする神道人は須らく神楽雅楽も習得しておくべきである。これはわれわれ神道人の心掛くべき事」という展望が示されている。海外における神道に対する強い関心があることはもちろん、ここでは「神道人」が大陸に発展していくことが前提とされており、自らがその責を負うという意味が示されているといえるだろう。

## 八、おわりに

19回にわたって実施された神宮皇學館の海外修学旅行は、参加した学生たちに様々な影響を与えた。第一に、明治以来の日本において最重要の政策課題となった大陸政策に対する認識を深めさせた。船中泊や車中泊が続き、移動時間

と訪問場所の多さからいえば決して十分な時間ではなかったかも知れないが、学生たちの旅行記からは日本帝国の海外進出の最前線を実見したことによる時局認識の深まりが看取される。満洲事変後に、未だ治安が完全に確保されていない地域を旅行したり、満洲国の「国都」新京で高層の官衙が聳える街路を歩いたりした経験は、日本と満洲との関係性や日本の満洲経営を現実のものとして認識させる効果があった。

第二に、学生たちに「日本帝国」の一員としての意識を持たせた点である。彼らは大陸に暮らす中国人、朝鮮人、ロシア人と様々な場面で触れ合い、それぞれに対して蔑視の感情を持ちながらも、ある時には日本による朝鮮統治にやや批判的な感想を持ったり、あるいは朝鮮人の教育について現地の学生から聞き、優秀な人材が潜在力として朝鮮にいるのではないかと考えたりした<sup>37)</sup>。また、朝鮮語、中国語、ロシア語を片言ながら使って会話を試み、現地の人々に親しむ経験をした。異国でのコミュニケーションの経験は、日本人としての自らを相対化させると共に、大陸の文化への理解を生み同胞意識を醸成することに寄与した。しかしその一方で、旅行後の感想には「偉大なる日本の生命力の躍動」<sup>38)</sup>を感じたり、新京における都市建設や満洲国の文化面を含む発展について「凡ては日本の援助が必要であり、それは日本人の躍進譜に他ならないのだ」<sup>39)</sup>など、日本こそが大陸をよりよく成長させていくと見なしたりする考えも旅行記には現れる。現地の人々への同胞意識を持ったことと、支配する側としての日本人という意識は彼らの中で矛盾なく併存していたことが分かる。この傾向は、海外修学旅行が開始された大正期にはほとんど看取できず、昭和期とりわけ満洲国成立後の感想に多く見出すことができる。日露戦争後に日本が大陸進出を開始した直後の旅行者たちが「帝国のまなざし」を持ち、戦後の開港への期待を膨らませていったことは従来指摘されているが<sup>40)</sup>、満洲建国に伴う「生命線としての満洲」イメージが喧伝された昭和初期にはそうした意識が改めて旅行者の間に濃厚に表れたことが伺える。

第三に、大陸が就職先の候補として強く認識されるようになったことである。事実、卒業後に多くの学生たちが朝鮮や満洲で就職した。

海外修学旅行は学生たちに当該期における日本帝国の現状を鳥瞰する視点を

与え、同時に学校における学修で得た知識を実践する場として大陸を認識させたのである。

\*本稿では、日本側の歴史的事象に関しては元号を用い、海外の事象に関する記述においては西暦を使用した。また、「支那」をはじめとして現在の観点からは使用することが望ましくない用語が登場するが、歴史的資料の直接引用に限りそのままの表記とした。

## 注

- 1) 大平和典『皇學館史話』（皇學館大学出版部、令和元年）、215ページ。
- 2) 「海外修学旅行」（『東京朝日新聞』1896年12月5日）。この記事中に「本邦学生の海外修学旅行の嚆矢」の記述がある。
- 3) 阿部安成「大陸に興奮する修学旅行—山口高等商業学校がゆく「滿韓支」「滿鮮支」—」（『中国21』29号、平成20年）。久保尚之『満州の誕生 日米摩擦のはじまり』（丸善ライブラリー、1996年）では昭和初期に行われた宮崎県立都城商業学校の旅行を扱う。
- 4) 日露戦争中の戦地視察旅行は、高媛「戦地から観光地へ—日露戦争前後の「満洲」旅行—」（『中国21』29号、平成20年）を参照。
- 5) 有山輝雄『海外観光旅行の誕生』（吉川弘文館、平成14年）、宋安寧「1906（明治39）年における「満洲教員視察旅行」に関する研究」（『研究紀要』第1巻第2号 神戸大学、平成20年）、拙稿「満洲を旅した学生たち—旧制学習院の満洲修学旅行を事例として」（福井憲彦監修、伊藤真実子ほか編『世界の蒐集 アジアをめぐる博物館・博覧会・海外旅行』（山川出版社、平成26年）、拙稿「学生は大陸で何を見たか—神宮皇學館の海外修学旅行から」（『日本歴史』第872号、令和3年）などを参照。
- 6) 「鮮鉄運輸成績」（『東京朝日新聞』大正9年6月8日 朝刊）。
- 7) 竹島寛「滿鮮旅行記跋」（『勢陽』第18号、神宮皇學館学友会 大正13年）、73ページ。
- 8) 旅行記録の翻刻は大平和典によって翻刻され、『研究開発推進センター紀要』第四号から「神宮皇學館修学旅行日記・滿鮮旅行記」と題して連続して掲載されている。
- 9) 前掲「学生は大陸で何を見たか」97ページ。
- 10) 第1回旅行を引率した教員の竹島寛は旅行の成果を以下のように述べた。「世の中見ずの吾々が初めて足跡を海外の地に印し…一行の心的内容を豊富ならしめた、今より後は、往古の日韓関係を研むるにしても、文禄慶長の役、さては日清日露の戦

役を説くにしても、或は又満鮮に関する時事問題を考察するにしても、少くとも旅行前より、より確かな解釈を下し得るであらう、修学旅行の成果は之れで充分である、目的は果された」（『満鮮旅行記跋』『勢陽』第18号、神宮皇學館学友会 1924年 73ページ）。

- 11) 例えば学習院の事例など（前掲「満洲を旅した学生たち」。
- 12) 「朝鮮満洲印象記」（『勢陽』第30号、昭和4年）。
- 13) 中国では1922年（大正11）に関東州租借地の回収運動が高まりを見せ、翌年には二十一か条要求破棄と旅順・大連の返還を日本政府に対して求めた。日本が勢力範囲としていた南満洲地域に居住する人々のほとんどが中国人であり、彼らも日本の満洲支配に対しては反感を持つものが少なくなかったと考えられるが、中国政府の動きに呼応した大規模な運動などは南満洲では発生しておらず、相対的にこの時期の南満洲は安定していたといつてよいだろう。
- 14) 「満鮮紀行」（『勢陽』第33号、昭和4年）。
- 15) 例えば昭和2年の記録を見ると「東清鉄道の客車のあの御粗末な不細工極まる内部の構造…ペンキ臭い天井を見つめて暫く無念無想、あきらめの境涯」などある（『鮮満の旅日記』『勢陽』第27号、昭和2年）。
- 16) 厳密に言うと、旅順・大連のある関東州は日本の租借地であり、また満鉄路線とその附属地が日本の統治の及ぶ範囲である。附属地外は中国の土地であるが、長春までは日本企業の進出も多く、政治的・軍事的。経済的に日本の影響力が強かったといえる。
- 17) 「大正11年 第1回満鮮旅行記」（執筆者は蒲地敏昶）、47ページ。
- 18) 前掲「朝鮮満洲印象記」。
- 19) 「満鮮紀行」（『勢陽』第42号、昭和7年）。
- 20) 「鮮満紀行」（『勢陽学報』第18号、昭和13年）。
- 21) 「満鮮旅行座談会記録」（『勢陽』第44号、昭和9年）。
- 22) 事業の詳細については、拙稿「満洲国期における学生の満洲派遣—満洲産業建設学徒研究団を中心に」（『東アジア近代史』第20号、2016年）を参照。
- 23) 「学生ノ満洲視察ノ件ニ付照会」（1933年4月21日 陸満普大日記 S8-12-42 防衛省防衛研究所蔵）。
- 24) 前掲「満洲国期における学生の満洲派遣」。
- 25) この感想を述べた学生が、研究団に同行した陸軍軍人である「沼田大佐」の名前を

挙げながらその成果について述べていることから、この学生が研究団の報告書ないしは報じた新聞記事などを読んでいたことは明らかであり、研究団の活動の成果を理解していたとみなすことができる。

- 26) ケネス・ルオフ（木村剛久訳）『紀元二千六百年—消費と観光のナショナルリズム』（朝日選書、2010年）。
- 27) 「大正11年 第1回満鮮旅行記」（引用部分の執筆者は高野潮匯）、42ページ。
- 28) 「満鮮紀行」（『勢陽』第39号、昭和6年）。
- 29) 同上。
- 30) 「特輯 北支満鮮の旅」（『勢陽学報』第10号、昭和11年）。
- 31) 近藤空「満鮮支旅行を了へて」（『勢陽学報』第10号 神宮皇學館文芸部、1936年）。
- 32) 前掲「満鮮旅行座談会記録」。
- 33) 前掲「満鮮支旅行を了へて」。
- 34) 昭和16年11月現在の記録による（『神宮皇學館館友会名簿』神宮皇學館館友会、1941年）。彼らの職業は朝鮮や台湾の公立学校教諭、満洲国祭祀府祭祀官、中支那従軍神職など。前掲「学生は大陸で何を見たか」101ページ。
- 35) 昭和7年の記録（「満鮮紀行」）など。奉天神社や長春神社の社殿はコンクリート製であった。コンクリート製社殿は関東大震災で焼失した神田神社（神田明神）の復興の際に建設された新社殿（昭和9年）が最初の事例であり、満洲の神社もそれに倣ったものであろう。
- 36) 「特輯 旅の随筆Ⅰ」（『勢陽学報』第22号、昭和14年）。
- 37) 例えば「鮮人の中学生と一緒にたつて、色々話した、五年生だつたが、その学生の話では鮮人の学生は非常に小説を読むので常識が頗る発達してゐる」というような記述がある（「満鮮旅行座談会記録」『勢陽』第44号、昭和9年）。
- 38) 「満鮮旅行印象」（『勢陽学報』第13号、昭和12年）。
- 39) 前掲「満鮮旅行印象」。
- 40) 前掲「戦地から観光地へ」214ページ



